

Institute for Language Education
Aichi University, Nagoya

Goken News

No. 1 April 1999



人生、上を向いて歩こう！
でも、パリの路の歩道は危険がいっぱい！
市はあちこちcaca(ウンコ)の“落とし所”を
用意しているのですか。

CONTENTS

◆特集 言語

- ・英語のコミュニケーション
(平尾 節子) 2
- ・日本語的ドイツ語ではだめなのか？
(竹中 克英) 3
- ・日本語の中のフランス語
(田川 光順) 4
- ・中国語における動物の分類から
(中川 裕三) 5
- ・ロシア語 (佐藤 規祥) 6
- ・外国語を通じて日本と日本語を知る
(常石 希望) 7

◆シリーズ 言語と人々

- ・ドイツとドイツ語
(加藤 克佳) 9
- ・ヴィーヴァー ラ リンガ イタリアーナ！
(=イタリア語万歳！)
(須藤 祐孝) 11

◆外国語コンテスト 14

- ・英語部門 ドイツ語部門
- ・フランス語部門 中国語部門
- ・韓国・朝鮮語部門 日本語部門
- ・日本語コンテスト入賞作

◆シリーズ 私の外国語学習法 18

現代中国学部3年 孫 炎

特集 言語

英語のコミュニケーション



法学部
平尾 節子

"Take it easy Prof. Hirao!"今年3月ニューヨークで開催されたTESOL'99国際学会で研究発表した時のこと、会場で友人のDr.Tangが声をかけてくれた。日本語では「頑張っで！」と言うが、「気楽に！」というのが英語の発送。欧米人はリラックス民族、日本人はテンション民族と言えよう。

ニューヨーク市のニックネームはBig Appleである。学会主催の"Big Apple Highlights Tour"が定刻より遅れた時Tour Guideの挨拶は"Thank you for waiting."であった。「遅れまして申し訳ございません」"I'm sorry."とは言わないのである。

TESOL学会の後、愛知大学との協定校であるUniversity of Wisconsin Law School を訪門し、Professor Greeneのアメリカ憲法の講義を参観した。学生たちは懸命にノートをとりつつ、盛んに質問をする。ディスカッションとなると、積極的に発言する。"Silence is not golden."「沈黙は金ならず」、自分の意見や主張を述べないと「沈黙は無能」と見なさしてしまう。

Prof. Larry Churchと奥様のFrederickaからDinnerに招かれ、"These Turkish dishes are very delicious. I hope you'll like them."と歓迎された。日本で「何もございませんが、召し上がってください」と言うのとは、対照的である。

医師のお嬢さんのことを褒めたら、"Yes, I'm proud of my daughter."と至極自然体で言われた。謙譲を美德とした日本古来の文化では「自慢の娘です」とは語らないが。

食前に「いただきます」食後の「ご馳走さま」に当る英語表現は、特にないが、食事のマナーとして、"This is very delicious, Fredericka." "Everything tastes really good! I enjoyed very much."とほめ言葉を連発した。和やかな楽しい雰囲気でのDinnerであった。

Frederickaが、デザートのコピーを夫のカップに注ぎながら言った。"Say when, Larry."「よかったら言ってね」Larryは"When."と返答する。"OK now, thank you."とか"That's enough."という意味表現である。

"Won't you have some more?"「もっと要りませんか?」と聞かれた場合、「ハイ、要りません」と"Yes"で答えておいて、否定したり、断ったりすると、相手は"I'm embarrassed."と言って当惑する。Yes, Noをハッキリさせることが大切である。断わる時は"No, thank you."

訪門の記念に"Would you mind posing with me?"「写真を一緒に撮って下さいますか」の対応として、「ハイ、いいですとも」の意思表示は、"No, certainly not."である。

会話の相づちとして、コミュニケーションの中で"uh huh"という場合が非常に多い。また、"No kidding!!" "Oh really?" 「ウッソー!」 「ホント」など、陽気で冗談好きのアメリカ人の合いの手である。"You're kidding!"裏返せば、"Are you serious?"である。

その日は金曜日、帰りの挨拶は、"Have a nice week end!"(ハバ ナイス ウイークン) "Thank you, same to you!"であった。

日本の伝統文化の話題に花が咲き、和製英語も話題となった。アメリカ人に通じない英語である。次の和製英語が実際に英語ではどのような表現になるのか、考えてみよう。(答は最終ページ)

- 1 ワンルームマンション
- 2 ベッドタウン
- 3 コンセント
- 4 ペーパーテスト
- 5 ホッチキス
- 6 ターミナルホテル
- 7 ガソリンスタンド

8 カンニング 9 シヤーペン 10 マジック
 11 アフターサービス 12 ベースアップ 13 ク
 レーム 14 クーラー 15 シュークリーム 16
 バックミラー 17 ハンドル 18 シルバーシー
 ト 19 ナイター 20 ジーパン

日本人が国際社会で尊敬を得るためには、日本
 の文化について、説明ができることが必要であ
 る。国際コミュニケー

ション能力を養成する
 とともに、異文化理解
 を深め、自文化を発信
 できる日本人のidentity
 が望まれる。



A man should know something of his own
 country, too, before he goes abroad.

(Laurence Sterne)



日本語とドイツ語を比較してその相違点・類似
 点を考えるというのは、言ってみればサカナとヒ
 トとを比較してその相違点・類似点を考えるとい
 うほど大胆なことです(わたしはもちろん、日本
 語はサカナで、ドイツ語はヒトだ、などと言っ
 ているではありませんが)。従って、ここではわ
 たしたち日本人がドイツ語を学ぶにあたって、こ
 の一点のみを心がければ、たとえ文法的に多少問
 題があっても、相手に自分の意志を伝達するドイ
 ツ語を口にすることができる、というところを簡
 潔に説明することにします。

例えば、「今日 / ガービーは / 16時まで / 図
 書館で / 勉強します。」という意味内容をドイツ

語で表現したい場合に、まず / で区切った語句
 (文の成分)を日本語(J1)とドイツ語(G1)を
 並置してみますと、次のようになります。 G2文
 は正しいドイツ語文です。)

J1: 今日 / ガービーは / 6時まで / 図書館で / 勉強
 します。

G1: heute / Gabi / bis 6 Uhr / in der
 Bibliothek / arbeiten

G2: Heute / arbeitet / Gabi / bis 6 Uhr / in
 der Bibliothek .

「6時まで」(bis 6 Uhr)、「図書館で」(in
 der Bibliothek)など、前置詞bis(「まで」)、
 in(「.....で」)と名詞の結びつきについては、
 この場合無視することにします。すると、日本語
 文の意味内容の伝達という点について言うなら
 ば、このG1文(本当はまだ文ではなく、ただJ文
 にならって語句を並べたに過ぎません)は、ほと
 んど100%に近い伝達度を達成しています。つま
 り、伝達したい意味内容をそのまま(語句の順位
 を変えないで)ドイツ語語句として表わせば、わ
 たしたちのドイツ語文は(文法的に多少問題があ
 るとしても)、コミュニケーションと言う点では
 十分に機能を果たしてくれるわけです。G2が正し
 いドイツ語文ですが、G1との違いは、文末にあっ
 たarbeiten(「勉強する」)が文の成分の2番目
 の位置に移動して、3人称単数形のarbeitetに変化
 している点にあります。しかし、意味内容の伝達
 という点から見た場合には、G1文とG2文とはほん
 の5%かそこいらの伝達度の違いしかありませ
 ん。

同じような例を挙げてみましょう。

J2: 今晚 / 僕は / ガービーと / 映画に / 行く / つ
 もりです。

G1: heute abend / ich / mit Gabi / ins Kino /
 gehen / wollen

G2: Heute abend / will / ich / mit Gabi / ins
 Kino / gehen .

J2文とG1分の文の成分の順位はまったく同じで
 す。G1文と正しいドイツ語文であるG2文とは、
 最初の例のarbeitenと同じように、わずかにG1文
 の文末にあった助動詞wollen(「.....するつもり

である」)が、G2では文の成分の2番目の位置に移動し、1人称単数形のwillに変化しているのが唯一の違いです。

極端な言い方になりますが、日本語文J1文あるいはJ2文の最後に置かれる動詞(あるいは助動詞)が、正しいドイツ語文G2文の場合には文の成分の二番目に人称変化して移動するというのが、文の構造上の最も重要な相違点です。ただし、度々指摘したように意味内容の伝達度ということだけを考えるならば、G1文とG2文(つまり、日本語的ドイツ語文G1文と正しいドイツ語文G2文)にはわずかな違いしかありません。そして、この違いを埋めるのが文法規則である、と言うことができます。

わたしたちはどんな言語でも(たとえ文法的には多少問題があるとしても)実際に使って、相手に自分の意志を伝達することに限りない喜びを感じます。授業ではこの点を特に心がけて、ドイツ語を楽しく学んでください。



日本語の中のフランス語



経営学部
田川 光照

花子と愛子の会話。

(道で出会って)

—あら、そのパンタロン、すてきね。

—なかなかシックでしょ。昨日買ったばかりなの。

—そろそろお昼ね。その辺のレストランにでも

入らない?

—カフェで軽くすませましょうよ。

(カフェでメニューを見ながら)

—何にしようかな。私は、オムレツとクロワッサン。

—まるで、朝食みたいね。私は、コロッケ定倉、いや、ピラフにしようっと。

(食べながら)

—オムレツにブロッコリーを添えてあるのはいいけど、マヨネーズをかけてあるのには閉口だわ。

マヨネーズ、あまり好きじゃないのよ。

—ピラフについてきたこのコンソメ、なかなかいけるわよ。

上の会話のカタカナの部分は、すべてフランス語から入った外来語です。原語を示すと、順番に、pantalon, chic, restaurant, café, menu (ただし、発音はムニコ), omelette, croissant, croquette (クロケット), pilaf, brocoli (ただし、英語起源の外来語としている国語辞典もあります), mayonnaise, consommé です。

このように、日本語の中にはフランス語起源の外来語がたくさんあります。身近な例をもう一つ挙げますと、日本の度量衡制度はメートル法を採用していますが、これはフランスから来ており、メートル(mètre)、グラム(gramme)、キロ(kilo)、リットル(litre)などの度量衡単位を用いるとき、私たちはフランス語のお世話になっているわけです。

中には、フランス語での意味や用法とは違った用いられ方をしているものもありますが、それはそれで趣があり、日本語の懐の深さでもいったものを感じさせます。たとえば、ズボンの原語はjupon (ジュボン)です。しかし、この単語は女性がスカートの下につけるペチコートを指しますから、日本人男性は皆、女性用下着をはいて闊歩していることになります。ちなみに、フランス語で「ズボン」を意味する単語は上の会話の中にもあるパンタロン(pantalon)です。男女の二人連れをアベックということがあります。この語源のavecは英語のwithにあたる前置詞で、日本語の

「アベック」の意味はありません。また、コンサートなどで、アンコールと叫んで再演奏を求めたりしますが、フランス語のencoreは「再び」とか「もう一度」といった意味の副詞で、日本語の「アンコール」のような用いられ方はしません。フランスで再演奏を求めるときにはBis, bis!と叫びます。

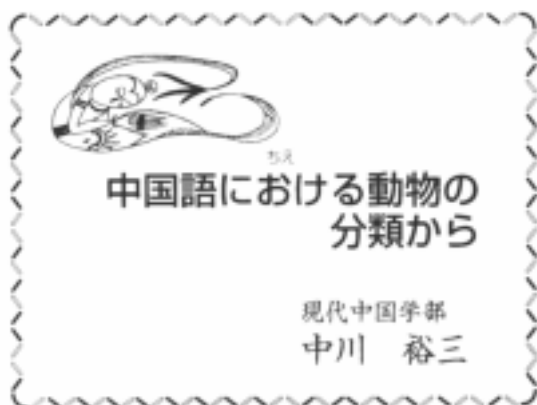
以上、ごく簡単にフランス語起源の外来語を紹介しましたが、さまざまな分野の日本語の中にそれとなくフランス語の単語が忍び込んでいます。国語辞典や外来語辞典で、どのような単語がフランス語から入っているかを調べてみると、意外な発見をすることがあるかもしれません。

<クイズ> 次の外来語の中にフランス語起源のものはいくつあるでしょうか。



- (1) アンケート
- (2) ビス (=ねじ)
- (3) ピーマン
- (4) シルエット
- (5) シュー・クリーム
- (6) マンション
- (7) クレヨン
- (8) デッサン
- (9) テラス
- (10) コンクール

(解答は20ページ)



日本語では、たとえば本を数えるとき、「本1冊」のように、書籍類専用の助数詞「冊」を用いますが、中国語では、「一本書」のように量詞「本」を用います。この助数詞あるいは量詞とい

うものは、事物を数えるときに文法的に必要な要素なのですが、世の中の森羅万象を様々なカテゴリーに分類する役目を果していることから、類別詞とも呼ばれます。

さて、動物のカテゴリーは一般に、日本語では類別詞「羽」「匹」「頭」、中国語では“隻”“匹”“頭”を用いて表します。日本語は中国語と同様に「匹」「頭」という漢字を用いるのですが、面白いのは、日本語と中国語では動物の分類の仕方が部分的に一致しない点です。日本語ではニワトリやネコは「ニワトリ1羽」「ネコ1匹」のように「羽」「匹」という異なったカテゴリーに分類されるのに対し、中国語では“一隻鶏”“一隻猫”のように同じ“隻”のカテゴリーに分類されます。またウシやウマは、日本語では「ウシ1頭」「ウマ1頭」のように同じ「頭」のカテゴリーに分類されるのに対し、中国語では“一頭牛”“一匹马”のように“頭”“匹”という異なったカテゴリーに分類されます。

同じ漢字を用いながら、どうしてこのような不一致が起こるのでしょうか。この問題を解くカギは、日本語と中国語の背景である社会や文化の相違にあります。実際、中国のように広大な国土と悠久の歴史を有する国においては、一国の中でさえ、分類の仕方が地域的、歴史的に異なっているのです。

まず地域的に見てみると、動物のカテゴリーは、中国の北方では前述の“隻”“匹”“頭”で分類され、“隻”が鳥類と小動物、“匹”がウマ、“頭”が大動物のカテゴリーを表します。ところが南方のある地域では、あらゆる生物を“隻”と“尾”の二つの類別詞で区別し、“隻”が足のある生物(主として獣類)、“尾”が足のない生物(主として魚類)を表します。中国には古くから南船北馬という成語があります。この成語が本来意味するところは、中国南方は湿潤多雨で河川や水路が発達していることから移動手段は主として船に頼り、北方は乾燥していて陸続きであることから馬に頼っていたということです。中国北方でウマ専用に使われる“匹”という類別詞が用意されているのは、北方においてウマがきわ

めて重要な役割を担っていたことの現れですし、南方で陸上動物と水中生物を“隻”と“頭”で区別するのも、河川や水路が発達している南方特有の気候・風土と密接な関係があるのです。

次に歴史的に見てみると、上古の昔、中国では“隻”は鳥類，“匹”はウマ，“頭”はあらゆる動物を包括したカテゴリーを表していました。このことから当時はまだウマ以外の動物の間にはそれほど大きな価値の差がなかったことがわかります。ところが南北朝時代になると、北方異民族の侵略により、当時の支化の中心であった中原と呼ばれる地域の社会に劇的な変化が起きました。その変化の一つとして、人間より小さな動物と大きな動物の間で価値の差が生じ、それが後に起こった類別詞の体系再編の引き金となったと考えられます。現在“隻”のカテゴリーに共通点の見出しにくい鳥類と小動物が同居しているのは一見奇妙にも思えますが、社会的に小動物と大動物を区別する必要が生まれた結果、小動物が“頭”のカテゴリーから元来鳥類のカテゴリーであった“隻”に引越して来たという歴史的な流れに目を向ければ、納得できるのではないのでしょうか。

以上のように、社会や文化が異なれば、同じ動物でもそれを分類するときの着眼点が異なります。分類の仕方は、中国という一国においてさえ一様ではないのですから、漢字という共通点があるとはいえ、日本語と中国語という異なった社会的、文化的背景をもった言語の間で一致しないのはむしろ当然です。言葉はコミュニケーションの手段ではありますが、言葉を通してその国の人たちの社会やそこで培われた文化を理解することは、

外国語学習のより高い目標だといえるでしょう。



こんにちロシア語は、旧ソ連邦内に住むおもにロシア人の母語として、一億六千万人の話者によって、日常的に話されています。そして、ソ連の崩壊後いまなお、ロシア国内の多くの少数民族やかつての共和国の諸民族にとって、唯一の共通語としても用いられています。

ロシア語は、あれだけ広範囲の地域で用いられているにもかかわらず、日本海に面したウラジオストクから首都のモスクワに至るまで、ほとんど方言差のない均一な言葉が話されているのです。これは、ロシア人がヨーロッパからウラル山脈を越え、次第にシベリアの各所に移り住むようになってから、あまり時代がたっていないことや、ロシア語そのものがとても保守的で、数世紀の間大きな変化を受けていないことに関係しています。日本語が狭い国土のなかで、いくつもの方言がはなされているのと比べると、とても対照的であるといえます。

よく知られているように、ロシア語では、キリル文字という少し変わったアルファベットが使われています。この文字は、一見変わっているといっても、英語のアルファベットと全く異なっている訳ではありません。そもそもキリル文字が考案されたのは、9世紀後半にビザンチンの教会が、スラヴ民族の間にキリスト教を布教することを目的としたものでした。そして、当時ギリシアで用いられていた文字をもとにして、アルファベットをつくり、当時のスラヴ語に特有の音を表



すために、ヘブライ語の文字や全く新たに考案した文字をつけ加えて完成させたのでした。それで、A, E, O, M, T, Cなどのなじみのある文字の他に、Rの音をPで表したり、Nの音をHで表す文字や、全く独特な文字が存在するのです。

変わった文字を使っているといっても、発音までも特殊な訳ではありません。英語では、一つの音を表記するのに、sh, ch, tsのように二つの文字を使う必要がありますが、それらがロシア語では特有の一つの文字で表記されます。母音の数は、日本語と同じものが5つあり、子音は、日本語のチャ、ピャ、ミャ、ニュ、ジュ、リョなどにあたる音が多いのが特徴で、全体としては、意外と整然としています。しかし、日本人が外国語を学ぶときに一番苦勞するのは、何といても子音連続でしょう。ヨーロッパの多くの言語がそうであるように、この点ではロシア語もすさまじい子音連続を誇っています。

ロシア語は、英語、ドイツ語、フランス語などと同じ系統のインド・ヨーロッパ語族に属しています。そのために、一般に文法や語彙の点で、互いに似通ったところが多くみられます。たとえば、その最も典型的な特徴といったら、名詞、代名詞、形容詞などに現れる性、数、格の区別でしょう。主語にたつ名詞の語尾が、aで終われば女性形、oなら中性形、子音なら男性形などというふうに、はっきりと性が区別され、語尾の形を変えることで、修飾関係や主語、目的語がどの語であるかを一目で見分けることができます。一方で、動詞の形式は規則性が一貫していて、他のヨーロッパの諸言語と比べると、時制の区別も簡素です。このように語形変化する言語ですから、動詞や副詞一語だけで文が成立する場合も良くあるのです。

ロシア語の語彙の中には、「兄弟」をbrat、「姉妹」をsestra、「息子」をsyn、「3」をtriというように、英語ともよく類似した語が見られるほか、太古の文化接触によって得られた、イラン系、ゲルマン系、バルト系、そしてトルコ系の沢山の借用語に満ちています。

驚くほど古い要素を今日まで継承しながらも、たえず外来の新しい要素を次々と取り入れて現在に至っています。



母国語しか知らない者は母国語さえ知らない。

これはゲーテの有名な言葉だと言われているが、いったいどういう意味であろうか。もしこの通りだとすれば「日本語しか知らない者は日本語さえ知らない」ということになる。日本人として生まれ日本語を自在にあやつるにもかかわらず、ことによれば「日本語さえ知らない」とはどういうことか？

私たちは中学、高校で英語を勉強してきた。だから英語という外国語と日本語の違いに多少は気づいている。日本語では“腹へった”、“疲れた”と過去形で言うのに、英語では“I am hungry”, “I am tired”と現在形で言うのはなぜか？。英語では主語を省略すると命令文などになり、勝手に主語省略ができない。しかし日

本語では、どうして自由に主語省略ができるのか？。逆に、英語では二重主語文は普通ありえないのに、日本語では“彼は頭がいい”とか“秋はサンマがうまい”などとかなり自由に言えるのはなぜか？。英語では一人称単数代名詞は“I”だけなのに、日本語では“わたし、わたし、僕、俺、あたし、うち、小生……”と多いのはなぜか？。これに類似して英語の“wife”は日本語では“妻、奥さん、奥様、家内、女房、かかあ、ワイフ、嫁さん……”など様々の訳語を便いしなければいけない。一体、日本語ってどんな言葉なの？と言いたくなる。しかも、上のようにたんに単語形態や文法構造だけではない。「発音」や「文字」においても日本語の骨髄は鮮やかである。SUN [sʌn] とかCAPTAIN [kæptain] といった語末 [n] 発音が日本人には難しく、意識しないできるとかならず [sʌŋ] や [kæptainŋ] という [ŋ] の音になってしまう。これは一体なぜか？、あるいは英語やドイツ語、フランス語の文字はアルファベットと呼ばれる一種類しかないのに、なぜ日本語には「平仮名」、「片仮名」、「漢字」という三種類もの文字があるのか。それは……中国語の影響だから……と答えても十分ではない。なぜなら、中国語の文字は漢字一種類しかなく、また日本と同じく中国漢字文化圏に属する韓国・朝鮮では、文字としてはいわゆるハングルがほとんどで一部漢字を用いる。つまり二種類の文字しかなく、ベトナムに至っては現在は一種類のみと言ってよい。なぜ、日本だけがおそらく世界でもっとも多いと思われる三種類もの文字を使う民族となっているのか？ などなど。外国人は言う、「三種類もの文字を憶えなければならない日本語、“I”，や“wife”に対して実に多くの単語数を憶えなければならない日本語！」、「一体、日本語ってどんな言葉なの？」。

つまり私たちは、母国語である日本語の特徴を、外国語を学び外国と比較対照してこそ、初めて知ることができるのである。外国語を全く知らずしては、日本語の何たるかを知らない。あるいは、

外国語を知っていても、それを思い切った視点で自分の国の言葉と比べてみる自由な発想がなくては、やはり白国語の何たるかに気付かないであろう。

大学の教養外国語では、ぜひこうした点を自由に考えてみてほしい。諸君はすでに受験用の外国語勉強という制約から自由にされたのだから。外国語を通じて自分の言葉と、そして自分の国の文化を考えてみてほしい。「言葉は文化を乗せて走る車」と言われるように、つぎには外国の文化と日本の文化を比較する目を大学時代に養ってほしい。それは国際化時代の大学生の必須条件でもあるからだ。

愛知大学での韓国・朝鮮語教育は以上の点を大切な要件として、諸君とともに考えていくことを目ざしている。「日本語ともっとも近い言語」と言われる韓国・朝鮮語講義は、同時に諸君と“日本語とは何か、日本とは何か”を考える場所でもある。大学における教養外国語、それは他の外国語科目においてと同様、“外国語を通して日本語と日本を知る”という目的にも仕えている。



シリーズ 言語と人々

ドイツ人とドイツ語



法学部
加藤 克佳

ツ人と接して感じたことに触れてみたいと思う。

ドイツ人は、小さい頃から、自分の意見を待ちそれをきちんと表現することを教育される。いわゆるインテリや学生だけでなく、どの人達もそういう印象を抱かせる。国民性といえるほど彼らは議論好きであり、各種の集会では「我が思うところ言わずして何のための集まりか」ということで、延々と議論が続く。知人との会食の場でも同様であり、言葉のハンディもあって本当にへとへとに疲れたものである。もちろん、大学の講義やゼミでの学生達の発言もきわめて活発である。日本では「沈黙は金、雄弁は銀」とか「十を知って一を言え」などといわれるが、ドイツでは「雄弁こそ金」であり「何も言わない奴は言うべきことが何も頭の中にないのだ」といわんばかりであって、極端な場合は「一つしか知らないのに十を言っている」と感じられることすらある。これは、欧米一般にいえることだが「黙っていてもわかってくれるのではないか」という日本人的感覚とはまったく異なる。善し悪しは別として、ドイツでは、自分の意見をきちんと主張しなければ自分を正しく理解してもらえないのである。

3 新入生の皆さんの中には、ドイツ語を選択した人も少なくないであろう。ドイツ語は、発音は比較的易しいが、どちらかといえばきつい感じのする言葉であり、文法も複雑な所が多い。そして、大変「論理的」な言語であるように思われる。ある概念や感覚を一つの単語や言回しで表現するのにも適していることが多い。この「論理的(logisch)」という言い方は日常的になっていて、たとえば会話の相づちの1つにDas ist logisch. というのがある。これは、直訳すれば「それは論理的だ」となるが、実際には「それはそうですね」くらいの軽い意味である。このように、日常会話にも「論理」が出てくるところがいかにドイツ的である。これに対して、日本語は大変曖昧な言語であるといわれている。むしろ、ドイツ語にはなく日本語だけにしかない単語や表現も少なくないし、日本語が繊細な言葉であることは間違いない。しかし、欧米語と比較すると、論理性で劣る面があることは否定できないように

1 私は、1996年8月から約2年間、南ドイツ・バイエルン州の古都・アウクスブルクに居を構えて在外研究(いわゆる留学)を行った。その間の経験から、外国や外国語に関心のある新入生の皆さんに若干のエピソードを紹介したいと思う。なお、私は、語学の専門家ではない(専攻は法律の中の刑事法である)ので、言語学的には不正確・不適切なことを述べるおそれも大きいですが、それだけにかえて感じたことを率直に表明できるかもしれない。

2 「日本人は外国語(英語)の読み書きは得意だが、会話は苦手だ」といわれる。これは、当たっている面と当たっていない点があるように思われる。たしかに、英語は中学校以来何年も勉強するので、大学に入る頃にはある程度読めるようになる。しかし、読めるといってもせいぜい現地の中学生レベルであるし、書く力はそれよりも劣る。一方、会話は、いわれるように実用に耐えないのが普通である。原因はいろいろ考えられるが、そのための練習の機会が少ないことは明らかであろう。また、話す方は何とかなっても、聞くのは大変難しい。これは、外国語を耳からでなく目から学んでいることに一因があるといえよう。しかし、これらはひとまず脇に除けておき、ここでは、自分の意見・考えの表現方法についてドイ

思われる。

これに先に述べた自己主張の仕方とを重ね合わせると、単に外国語だからということでない外国語の難しさの原因と外国語習得の鍵らしきものが浮かび上がってくるのではないか。つまり、自分のいいたいことを論理的に表現する訓練ができていないこと（日本語で！）が、単語や文法の知識不足にも増して外国語の壁となっているように思われるのである。時折、英会話のできる若者の中には単にファッションとして英語を話す人が多く、発音や挨拶程度はうまいがすぐに話題が尽きてしまうということを知ることがある。流暢な発音や如才なさも大切だが、中身も劣らず大事だということになる。

4 そうはいても、形式面の習得すら日本人には難事である。日本人が欧米語の習得に大きなハンディを負っていることは疑いない。写真（左から7人目が筆者）は、在外研究先の1つであるヘルマン教授（アウクスブルク大学）のゼミナールでスイス南西部・シオンに合宿に出かけたときのものである。これは、アメリカのフィーニー教授（カリフォルニア大学）とともにドイツとアメリカの刑事法を比較するという内容であり、報告も討論も全部英語で行われた。ヘルマン教授によれば、参加した学生は英語を比較的良好に勉強しているのでうまいとのことであったが、それにしてもドイツの大学生の英語力には驚嘆させられたのである。そこで、彼らに英語の勉強法を聞いてみると、「ギムナジウム（日本の中学・高校に相当す

る）で何年も勉強したから」といわれ言葉に詰まってしまった。もしそれだけだとすると、日本の大学生も英語を自由に操れなければならないはずだからである。しかし、学生の中には「英語はドイツ語の親戚だからなんとかなるよ」という答えに接し、少々安心した。そうだ、やはりドイツ人にとっての英語は日本人にとってのそれとは違うのだ、と。たしかに、単語や文法など、同じゲルマン語として似ている所は大変多い。それとともに、自己主張を当然とする彼らの気質や、英米系を含む外国人に接する機会の多いヨーロッパの環境が、外国語の壁を乗り越えるのに有利に作用していると感じられるのである。

そんなこともあってか、ドイツの学生の中には5、6か国語話せる者すらいた。最初は驚いたが、納得できる面もあって次第にあまり驚かなくなった。私が少し通った外国人のためのドイツ語学校でも、文法はともかく、ドイツ語（らしきもの）をうまく話す能力はヨーロッパ出身の方が遙かに上であった。何といっても言語を含む文化や環境が似ているのである。スイスには4つの国語があるが、そんなことは日本では考えられないであろう。ただし、この点は必ずしも欧米語間だけに限らないようである。私の妻にドイツ語を教えてくれた女子学生は短期間の勉強で日本語をかなり習得し、その後東京に1年間留学してますます日本語が上手になったが、彼女は、あるいは外国語習得の本質的な勘所を体得していたのかもしれない。

むろん、ドイツ人だから当然英語に苦労しないということはないようで、一般市民の多くは英語をはじめ外国語が苦手である。また、ドイツ人学生の中には英米に留学したり旅行で英語圏に出かけたりする者が多く語学学校も少なくないことからすると、外国語習得の苦労は彼らにもあることは間違いないであろう。そうはいても、日本語と欧米語との違いが大きいことは歴然としている。これからますます国際交流が活発になることを思うと、言葉の障壁は少しでも小さくする必要がある。そのため、早期から英語教育を行うことが提唱されており、それはそれで有意義である



う。しかし、私は、母国語で論理的に自分の意見・考えを主張する訓練や、外国の社会・文化に肌で触れる機会を増やすことも劣らず重要なことではないかと、ドイツ滞在中にしばしば感じたものである。一方、「外国語を学ぶことでより深く自国語を知る」というのも、やはり真理だと思われる。外国語の学習は単なる外国追従ではなく、相互理解の土台になると考えるべきであろう。

以上の個人的・主観的な体験や意見が、外国人や外国語と接する際に何らかの参考となれば幸いである。

ヴィーヴァ ラ リングァ
イタリアーナ！
(=イタリア語万歳！)

法学部
須藤 祐孝

イタリア語はやさしい、と言われることがよくある。「一番やさしい外国語」——こんなフレーズをつけたイタリア語文法書の広告を新聞か何かで見かけたことがある。その時は、何とも言えずウンとうなってしまった。そのわけは、色々ある。それを語っていくと、イタリア語の特色を、さらにはイタリアという国の、あるいはイタリア人の特色までも語ることになるのではないかと思う。この文のタイトル、ヴィーヴァ ラ リングァ イタリアーナ！の綴りは、Viva la lingua italiana！である。すぐ分かるように、発音はほとんどローマ字読みの通りである。パスタ = pasta、ピッツァ = pizza、ヴィーノ = vino（ワイン）、ブッコ = burro（バター）、フォルマッジョ = formaggio（チーズ）、等々、ちょっと見聞きすると、これはやさしそうだぞと嬉しくなってくる。

そして文法を学び始める。やはり何となくやさしい感じがする。他の外国語に比べて確かにやさしいかもしれないぞ、とそんな気がしながら入門文法の半分ぐらいまでは進めるかもしれない。この間に出てくる簡単なフレーズを覚えていくと、なんだかもイタリア語は自分のものになったような気さえするかもしれない。これはとても貴重なことだ。外国語に上達するには、その言葉に親しみやすさを覚えるのが一番だからだ。

このあたりでイタリアに観光旅行にでも出かけ、覚え立てのフレーズを口にしてみると、何とすべて通じてしまって、感激してしまうかもしれない。やさしくて気さくなイタリア人は、ことにお金持ちの日本人の財布に期待している店やホテルの人たちは、イタリア語がお上手ね、なんてほめてくれるかもしれない。これでもうイタリア語は大丈夫、なんてすっかり安心してしまってもいい。

でも、やはりそう簡単にはいかないのが、外国語というものだ。初級文法ですら、最後の三分の一ぐらいのところになると、あれこれ面倒なルールが少なくなくなり、覚えねばならぬ事が多くなってくる。しかし、それでも、他の外国語に比べれば、まだいい方かもしれない。しかも、このあたりまでに練習を積んでくる中で感じることで、イタリア語の作文は、とてもやさしそうだ。何と言っても語順についてのルールが厳しくない感じがする。どの語をどこにおいても、つまり、語順なんて気にせずに頭に浮かんでくる単語をそのままの順で並べていけばいいような感じさえするかもしれない。そしてイタリア語ってラクな言葉だなと、すっかり安心してしまってもいい。

でも、もうこのあたりまでにそう簡単ではないぞと気づく人が、少なくないだろう。簡単そうに見える時でも、そちこちで、えっ？と驚かせられたり、いやあ！と思わず声をあげたり、ウンとうならされたりせずにはおれないことに何度も出くわしてしまっているはずだからだ。

たとえば、すごく簡単そうに見えた初めの発音にしてからがそうである。日本語文字で表記すれ

ば「り」となる音がri, li, gli, と三つある。これを聞き分ける事は、実に難しい。発音し分けるとなると更に難しい。また、日本語で表記すれば「に」となる音は、鼻音の「に」=niと日本語の「に」そのままの音であるgniの二つがある。これを常に正確に聞き分け発音し分けるのも、決して容易ではない。

——20歳代の終わり近く、ローマ大学で研究していた時、休日に公園の芝生で寝ころんでいたら、3 - 4歳の男の子がそばに来て座り込んだ。私が、名前は何ていうの?と尋ねたら、彼は「ニーノ」と答えた。私が、「おお、ニーノか」と言ったら、彼は、「ノー、ニーノ」と言い返してきた。私が「分かった、ニーノだ」と言ったら、彼はまた「ノー、ニーノ」と言う。私が「分かった、ニーノか」と繰り返すと、彼は明らかにイライラした表情を見せながら、大きな声で、「ノー、ニーノ」と叫んだ。ここに至って私も気づいた。彼は自分はNino、つまり鼻音の「に」で始まる名前「ニーノ」なのに、何度そう言っても、相手の大人が分からずに自分をGnino、鼻音でない「に」で始まるニーノだとばかり言っているのだ。カリカリしてしまったのだ。私が細心の注意を込めて鼻音を発し、「ニーノだ」と言ったら、彼は、やっと分かったかと言わんばかりに、「フン」と言うと、さっさとどこかに行ってしまった。——イタリア語の発音を甘く見てはいけなぞ、やさしいイタリア人達から「イタリア語がお上手ですね」なんてお世辞を言われて無意識のうちに安心しては本当の上達は望めないぞと、この時、私はこの「ニーノ」君から厳しく教えてもらったのだ。

簡単そうに思える文法にしても同じ、いや、これ以上である。たとえば冠詞の用法である。一応のルールはある。それを記憶しておくことは決して難しくはない。しかし、そのルールにどうにもあてはまらない用法が、限りないと思われるほど多い。どうしてここでこんな冠詞を使うの? どうしてここでは冠詞がいらなの? と屈辱すなわち文法上のルールからはどうにも分からない用例に、頻繁に出くわす。イタリア人たちに聞くと、

とにかくここではこうなるな、と決まって答える。つまり、ルールにはなっていない、あるいは、ルールには反するかもしれないけど、とにかくこういう用法なんだよ、と言うわけだ。

同じことは、作文の時の語順になると、更に複雑に表れる。ちょっと見にはどうでもいいように思える語順に、やはり、ルール化されていないかのように思える様々な様式があって、その一つ一つが独自の微妙なニュアンスの違いを作り出しているのだ。これは、もう、外国人にはマスター不可能ではないかとさえ思えるほどだ。

この語順の複雑さは、イタリア文を書く時のみならず、読む時にも我々を迷わせる。筆者によって、文章の構造が実に多様に異なるから、慣れていない筆者の文章、ことに独特の文章を読む時は、初め少し慣れるまで、とても苦労することが少なくない。少しくらい慣れても、なぜか分からぬがとにかくこの人の文章はどうにも読みにくいと言う場合も少なくない。これはもう、多く読んで慣れていきながら何となく読めるようになっていく他はない。文法や文体のルールではどうにもならない、イタリア語・イタリア文の難しさないし深さである。「一番やさしい外国語」なんてとても言えないのだ。

こういうことは、イタリア人のための大きな、本格的な文法書を読んでもなお良く分かる。ある項目のルールの説明はほんの数行で終わっていて、それに続いて、しかし次のような用法もある、と例外を示す文章が延々と数ページにわたって続いているといったことが珍しくない。まさに、ルールはあって無きが如し、なのである。

しかし、決して無いのではない。無いかの如くでありながら、きちんとあるのだ。あるのだけれど、それに当てはまらない、ないしはそれに反するかの様な例が実に豊富なのだ。

言葉から受けるこうした印象を、イタリアという国ないし社会、あるいはイタリア人たちから受けることが非常に多い。表向きにはルールはきちんとあるのだけれど、しかし、実際の日常生活の中ではまるで何のルールも無いかの様な印象を受ける、と言ったことは決して珍しくはない。

あるはずのルール通りにきちんとやってもらおうなんて思っていたら、イタリアではかえってイライラさせられるばかりで、非効率なこと甚だしい。ルール通りに何かをやってもらえたら、今日は何たる幸運！と喜ぶぐらいでない、イタリアでの生活はできない。

では何もかも無茶苦茶かという、決してそんなことはない。その場その場できちんと独自のルールはある。それがまるでルールでないかのように表向きには見えながらきちんと独自のルールとして存在している。そこが、ちょっと見にはどうにも分からない。いや、かなり慣れ親しんだつもりでいても、分からない。しかし、とにかく一定のルールはある。

このように、あるはずのルールが無いかのようであり、無いかのようであるルールがきちんとあるといった感じをイタリア語からも、イタリア人たちの生活からも共通に受けるのは、しかし、当然かもしれない。言葉はまさにそれを創り出し、使い続ける人たちを表現するものに他ならないはずだからだ。イタリア語の親しみやすさと難しさ、深さは、そのまま、イタリア人たちの親しみやすさと理解し難さ、深さであると、つくづく思う。

イタリアを、あるいはイタリア人を表面だけからあれこれ決めつけてしまっただけだと思ってしまう。彼らは確かに親しみやすくやさしい。しかし、やはりどこか外見からはつかめない深さを持っている。彼らの経済は日本のそれと比べると、表に表れる数値の上では劣っているかも知れない。彼らの収入は日本人のそれよりも少ないかもしれない。しかし、彼らがもつめる生活必需品、とくに食料は日本よりもはるかに安価である。だから生活費はずっと少なく済む。それに、彼らは、我々日本人よりもはるかに多くの時間的余裕を持って暮らしている。何のためだか知らないけれどいつもアクセクと、誰も彼もが「頑張れ」、「頑張りましょう」と気張っている我々よりも、はるかに自分自身を大事にして、精神のゆとりをもって暮らしている。それは、彼らと親しくつきあってみて初めて分かってくることで、

表向きの統計の数値などからは分からない。

こうした精神のゆとりが、おそらくは彼らの親しみやすさ、やさしさになって表れているのだろう。たとえば、電車やバスの中での席の譲り合いなど、日本ではもうとても見られないほどである。また、どこの図書館も、大学のそれであれ公共のそれであれ、どんな外国人にでも、身分を証明するものを示ささえすれば、本を自由に利用させてくれる。法的に禁止されているものでなければ、コピーも自由にとらせてくれる。この自由のおかげで、私もずいぶん研究を助けられている。——（ここでも、法的なルールがあるのに無いかのようになることがある。係の人と親しくなったり、あるいは日本から短期的にわざわざ文献を探しに来たのだからと事情を説明して分かってもらえたりすると、あるはずのルールが無いかのようになって、貴重本のコピーが得られることも珍しくない。）——日本で、その大学にまったく無関係の者がその図書館をヒョイと訪ねて行って、身分証明書だけを示せばどんな本でも自由に利用させてもらえるなんて、きわめて難しいだろう。

二十代の終わりからこれまで、ローマ大学とフィレンツェ大学で、あわせて延べ三年余り過ごした。また、短期的に学会や文献探して何度かイタリアを訪れた。それなのに、いつも、やはりどことも言えず魅力的だな、いいなあ、と思うことが多い。どうにも理解しがたい複雑さや難しさを含めて、やはり、ヴィーヴァ イタリア（Vival, l'Italia! = イタリア万歳!）、ヴィーヴァ ラ リングァ イタリアーナ！（= イタリア語万歳!）なのである。



第4回 外国語コンテスト

英語部門

英語のコンテスト審査はここ数年、発音やアクセントだけでなく、歌唱力も評価してきた。どれだけ本物「らしく」歌うかをそれなりに重視してきたわけだ。そのせいかどうか分からないが、参加者に占めるバンドの経験者の割合はかなりのものである。こうなると、どれだけ歌い慣れているかも入賞の大きな分かれ目になる。英語コンテストの入賞基準としてどうかという意見もあるだろう。だが、歌詞を暗記し歌手の歌い方を真似ることも、英語力アップの大事なステップではないだろうか。

今年の入賞者3人が歌ったのはサイモンとガーファンクル、チャック・ベリー、エリック・クラプトン。エリック・クラプトンの曲以外は、古典的とも言えるスタンダード・ナンバーだ。チャック・ベリーを歌ったM君はリズム・アンド・ブルースの醍醐味を満喫させてくれたし、他の2人もラブ・ソングと最愛の息子を事故で失った悲しみの歌をじっくりと聞かせてくれた。大変ハイ・レベルのコンテストだったと思う。入賞を逃した皆さんの多くも、当確線ギリギリで、審査は難航した。来年以後も、元気な皆さんの多数の参加を望みます。また、平尾先生と職員の皆さん、名城大学の皆さんも歌と演奏でコンテストに花を添えて頂きました。有難うございました。

- 1位 壁谷 勢太 (4年)
- 2位 水野 智降 (3年)
- 3位 伊藤 孝 (1年)
- 永田 知巳 (1年)
- 武藤 宗洋 (1年)

(緒方康)

ドイツ語部門

12月11日(全)208番教室で第4回外国語コンテスト・ドイツ語部門本選が開催された。課題は、ドイツ歌曲中の名歌シューベルトの「冬の旅」の中のSt" ANDCHENとドイツの名優マレーネ・ディートリッヒの歌ったLILI MARLEENのいずれか1曲の歌唱である。審査は経営学部客員教授クボタ=ミュラー先生に務めていただいた。前者は切々としかも物悲しく、清冽に、描しがたい恋心を歌い上げるフィッシャー・ディスカウの清み渡った歌声が、後者は厭戦的な気分の色濃い戦場の兵士がかつての恋人を思い歌う気だるいマレーネ・ディートリッヒの慕情が、かつて人々の心を深く揺り動かした名曲である。

今回のコンテスト出場者は残念ながら例年に比べて少なく、今泉幸映(1年)、安藤康弘、三津伸枝、吉田将之、箕浦明希子、山本響子、八田信(2年)、平山宗也(3年)君の8名だった。第1次選考、第2次選考を経て、入賞者にはLili Marleenを歌った山本響子さんと安藤康弘君が、難しい歌曲St" andchenを見事に歌い上げた三津伸枝さんが選ばれた。

入賞者は12月15日(火)開催の表彰式で発表され、優勝山本響子さん、準優勝三津伸枝さん、第3位安藤康弘君に、名古屋語学教育研究室長を通して、石井吉也学長の表彰状と賞品が授与された。表彰式の後、優勝者による発表会が引き続き行われ、山本響子さんは、戦場に駆り出され、虚しい戦いに苦しむ兵士の憂愁と、かつて束の間の出会いの一時に愛し合った女性を思う恋心を見事に表現し、感動を呼んだ。

今回のコンテスト開催にご協力下さった教職員の方々、果敢に課題曲に挑戦し、出場してくれた学生の皆さんには心よりお礼を申し上げます。

(竹中克英)

フランス語部門

今回のコンクールには2年生2名、3年生7名、4年生1名、計10名の応募があった。一位2年川内まりこさん、2位3年山田歳徳君、3位3年松尾錠治君であった。全応募者に、ポール・ヴェルレーヌの詩 *Il pleure dans mon coeur...* (都に雨の降るごとく...) の朗唱をしてもらった。

この詩の朗唱上の困難はまず第一に発音、とりわけ [l] と [r]、[si] と [ji] の違いをいかにうまく区別できるか、そして鼻母音をいかにうまく発音するかである。第二は、韻、音調、間合い、イントネーションに注意しながら詩のもつ音楽的感興をいかに強調できるかである。第3には、この詩の意味を理解したうえで、たとえフランス語がわからない人がいても、音の響きによってだけでもいかに聴衆を感動させるかということである。この詩は長くはないが、応募者にはかなり難しかったところがあったかとも思われる。川内さんだけがとりわけ発音がうまく、上手に表現ができた。2、3位は準備はよくしていたと思われるが、発音と発表のしかたにもうひとつ努力が足りなかった。その他の発表者については、大きな違いはなく、ランクづけは困難であった。

(ラッセン、河原)

中国語部門

「第四回外国語コンテスト」(中国語部門) は、十二月十日木曜日午後一時三十分より、213教室にて開催した。今年度から、教養部廃止に伴い、本コンテストの主催が名古屋語学教育研究室となったことから、現代中国学部の学生も参加できるようになった。ただし、法学部・経営学部と現代中国学部とでは、中国語の学習環境(授業時間数・ひとクラスあたりの学生数、など)という点で、かなりの差があるため、法学部・経営学部部門と現代中同学部とに分けて実施することにした。

参加者を募ったところ、法学部・経営学部部門には14名(うち1名辞退)、現代中国学部

部門には10名(うち2名辞退)の積極的な応募があった。

コンテストの内容は、参加者に予め渡してある課題文を朗読してもらう、というものである。課題文の題名は以下の通りである。

現代中国学部部門「好极了」

法学部・経営学部部門(一年生)「喝酒」

同(二年生)「城里人的拳夫」

審査員は、現代中国学部の藤森猛先生・王硯農先生・中川裕三先生・安部悟先生にお願いした。

まず初めに、現代中国学部部門の学生に朗読してもらい、十分間の休憩をはさんで、法学部・経営学部部門の一年生、同じく二年生の順で行った。さすがに現代中国学部の学生は、中国語を専門的に学んでいるだけあって、発音・声調とも安定度が高く、実に流暢なものであった。法学部・経営学部の学生のなかには、「カルチャーショックを受けた」と話す者もあり、かなりの刺激を受けたようであった。法学部・経営学部の学生も、必ずしも恵まれた学習環境にあるわけではないなかで、かなり善戦していた方だと思うが、やはりまだまだ発音・声調ともに安定感を欠いていた。この点は、教える側もおおいに反省し、今後の授業に活かしていきたいと思う。

発表後、審査員の先生方から講評を頂いた。

藤森先生からは、主に法学部・経営学部の学生に対して、発音については基本的にはまずまずであったが、声調についてはまだまだ不完全であったこと、発音の練習では特に声調を重視するように、との指摘を中国語により頂いた。

王硯農先生からは、やはり法学部・経営学部の学生に対して、例えば「dou」なのか「duo」なのか、母音の区別がはっきりしていなかったことを例に挙げられ、個々の単語の発音(特に母音)をもう少し明瞭にすべきとの指摘がなされた。そしてさらに、これからはしっかりと練習していけば、みなさんならきっと、ますます上手に話せるようになるかと信じています、との励ましの言葉を頂いた。もちろん中国語で。

中川先生からは、まず現代中国学部の学生に対して、みなそれぞれ上手であったが、発音がすご

くよいというわけではない、との更なる進歩を期待した言葉がかけられた。一方、法学部・経営学部の学生に対しては、やはり声調の不安定さについての指摘がなされ、テープをよく聞いて真似をするように、また発音の基礎をおさえて練習すればもっとよくなるはずだ、との励ましの言葉を頂いた。

安部先生からは、まず現代中同学部の学生に対して、実力が伯仲していたこと、しかしまだまだ完璧ではない、とのやはり更なる進歩を期待した言葉がかけられた。一方、法学部・経営学部の学生に対しては、テープなどを活用し、いい発音をたくさん聞いて、耳慣れをすることの重要性を指摘され、さらに自分の発音を録音し、実際の発音と比較してみることも効果的な学習方法である、との教えを頂いた。

今回は、初めにも述べたように、初めて現代中国学部の学生の参加があり、とりわけ法学部・経営学部の学生にとっては、実により刺激になったと思われる。これを機に、中国語を通じての学部を越えた交流が益々盛んになることを心から希望したいと思う。

なお、入賞者は以下の通りである（学年は実施時のもの）。

現代中国学部部門

- 第1位 仲庭 祥織子（現代中国学部 2年）
- 第2位 森 謙二（現代中国学部 3年）
- 第3位 翠 まゆ子（現代中国学部 2年）

法学部・経営学部部門

- 第1位 清原 早苗（経営学部 2年）
- 第2位 田中 洋平（経営学部 2年）
- 第3位 猪飼 義臣（法学部 1年）

（矢田博士）

韓国・朝鮮語の部

第4回外国語コンテスト、韓国・朝鮮語の部は、'98.12.10（木）午後開催され、陶山・常石両審査委員立会いのもと、20名もの参加学生と多数の聴衆で会場は熱気にあふれました。今回、第4回の「総評」を示すとすれば、次の二点を挙

げることができまます。

第一点、車道校舎から5名もの学生参加があったこと、および、一位と二位をこの車道校舎の学生がさらっていった点。今後も、車道校舎の学生諸君の参加と健闘を期待します。

第二点は、「下手」というか、もともと決して発音がうまいとはいえない学生諸君が積極的に参加してくれた点です。君たちの努力の成果を、教師だけはよく知っています。教育の一環としての外国語コンテストは、君たちの参加によってこそ、その目的の一面が充分に果たされているのです。

第4回コンテストの入賞者は次の通り。

- 一位 高橋 ひろみ 車道 98SJ1020 1年生
- 二位 宮崎 央 車道 97SJ1201 2年生
- 三位 本郷絵里奈 名古屋 97J1341 2年生

新入生の皆さん、詳細は韓国・朝鮮語の授業のなかで説明しますが、愛知大学では毎年こうした外国語コンテストを秋学期に実施しますので、発音に自信がある人も、自信がない人もぜひ参加しましょう。

（常石希望）

日本語部門

「日本語スピーチコンテスト」は、十二月十日（木）午後開催されました。「留学生の見た日本」というメインタイトルのもと、参加学生それぞれがサブタイトルをつけ、自分の体験を思いを込めて発表しました。来日して数年を経、さまざま出来事を体験してきた留学生にとっては、日頃の自分の思い、考えを知らせるいい機会だったでしょうし、同時に、聴衆の日本人学生にとっては外から見た日本を知らされる、これもまた良い機会であったようです。

審査は、「日本語」担当の大西、山本委員に加え、法学部から一名、現代中国学部から二名の学生が学生委員として同世代の眼で見た評価を加えました。

コンテストの入賞者はつぎの通りです。（入賞者のスピーチは後に掲載します。）

- 一位 舒治雪

二位 単俊飛

(山本雅子)

日本語コンテスト入賞作

第一位 廃棄物に思う

現代中国学部3年 舒 治雪

皆さん、こんにちは。今日、私は廃棄物について皆さんに聞いていただきたいと思います。

廃棄物と言えば、皆さんの頭の中になにを思い浮かべますか。いらぬもの、使われないものなどでしょう。でも、日本の廃棄物は本当に使われないものなのでしょうか。

ごみが捨てられた場所へ行けば、すぐ分かります。まだ使える古い車やパソコン、家電用品、それから家具などが、たくさん捨てられています。そして、粗大ゴミの山は益々高くなり、ごみの処分のために日本政府は頭を抱えています。これは言うまでもなく、皆さんご存知のことだと思います。

では、食べ物の廃棄物についてはどうでしょうか。今、ここで聞いて下さっている皆さんの中にはコンビニやスーパーでアルバイトをしている方もいると思います。私は最近コンビニでアルバイトをしています。仕事は順調にやっていますが、廃棄物の問題についてはちょっと違和感を待っています。それは毎日コンビニの食品の廃棄時間のことです。実は、最初の日からこんなことがありました。仕事が終わって、帰ろうと思っていた時に、一緒に仕事している人が私に「舒さん、ごみを出して。」と言いました。よく見ると倉庫中に二つ黒いごみ袋がありました、ぎっしりと弁当やケーキ、サンドイッチなどが詰まっていました。

「これは...ごみ？」と私は自分の目を疑いました。その人は「仕方がない、賞味期限が過ぎたから。」と言いました。「もう腐りましたか。」と私は聞きました。「いや、そうじゃない、賞味期限は食物が美味しく食べれる期間だ、多少時間が過ぎても、品質上の問題はないけど」と、その方は答えました。「産業廃棄物って焼却されますか？」と私はその人にしつこく聞きました。「そうですね、生物だから。最近堆肥としてリサイク

ルする人もいます。」と答えてくれました。

実は、朝10時賞味期限のものは10時前すでに廃棄してしまいました。同じように、午前11時前や午後6時前などのものはその時間前全部廃棄しました。その店のオーナーに会って、「賞味期限前に半額に処分したら」と私が提議しました。

「いや、絶対しない。これはうち店の方針だ。」とオーナーさんがキッパリ断りました。

白いご飯、狐色に揚げられた唐揚げ、すてきなケーキ、おいしいそうなサンドイッチ。さっきまで商品だったのに、今はごみ。堆肥の仲間入り。どう見ても私は納得できません。中国にいた時、日本のテレビドラマ「おしん」の主人公が食べ物のために、生きるのために幼い時から家を出て、働く姿に大変感動しました。涙を流しながら、それを見ました。今は、もったいないなと思いながら、ごみ袋に私は弁当を捨てています。きれいに盛り付けた弁当はまるで踏み漉された花のように、無残な姿になってしまいました。

私は戦争の炊け野原から今日の日本を建てた人々に敬意を払うけれども、むやみにものを無駄にする人はどうも好きになりません。日本は豊かな国と言われています。その豊かさは決して空から降って来たものではありません。物を大切にしなければなりません。高度成長をしている日本は「大量消費、大量生産、」のアメリカ流の経済を取入れ、大量の資源を無駄にしてきました。

二つのごみ袋は風船のように膨らんでいました。台車に乗せるとき、中から「ギュー、ギュー」と弁当の泣き声が耳に入りました。よその国では、餓死する人もいますよ」と私は思わず叫びたくなるような気持ちになります。白いご飯、狐色の唐揚げ、すてきなケーキ、もともとこれらは人のために作ったものなのに、燃やすと、二酸化炭素など、とんでもない物に変身してしまいます。

「もう終わったか？」と店長は様子を見に来ました。台車を押しながら、私は店長に「お弁当が泣いていますよ」と言いました。不思議そうに店長は私を見て、「そうね、全部で三万円だ。」と言いました。

これで私のスピーチを終わらせていただきたい

と思います。御静聴どうもありがとうございました。

第二位 万引きする老人

現代中国学部2年 単 俊飛

私はスーパーでアルバイトをしたことがあります。この間にさまざまな老人を見てきましたが、驚いたことを体験しました。というのは「万引」ということです。

「万引」この言葉を聞いたら、絶対いいイメージはしないでしょう。「どこの国でもこんなことはあるんじゃないか」とみなさんはそう思うでしょう。一般的には万引するはほとんど若者たちだと思われています。しかし、意外だったのは私が見た万引は老人だったということです。

いつも同じ服装で袋を後ろにぶらさげて、店の中で同じ売り場にずっと立っていて、何も買わずに店を出ていくおじさん、一回買い物をして、また、店に戻って、うろうろしているおばあさん、店の人は何回も注意しましたが、それでも、毎日来ていました。最近、私たちの注意にやっと気がついたのか、もう店に来なくなりました。彼らの服装を見ると、貧乏には見えません。また、店で一緒に働いている店員から聞いたところでは、日本人は定年になったら、一定の年金がもらえそうです。これは日本全国で実施されていますのに、老人は何故万引をしたのでしょうか？彼らに対する年金が少ないからでしょうか？スリルを味わいたいからでしょうか？

私が日本に来る前にテレビや本で見た日本は豊かな経済大国でみんなは幸せに暮らしていると思っていました。しかし、このようなことを実際に自分の目で見ると、本当に信じられないと思います。今の日本は高齢化社会だと言われていますが、一人でいる老人が多い気がします。そして、今の日本の苦者たちは老人への関心がなくなっているように思います。老人たちは寂しいのです。彼らはだれからも相手にされず、孤独なのでしょう。彼らは周りの人に洋意を引きたくて、こんなことをするのはないかと思えます。いつか、私たちも年をとります。そのとき、今の彼らのよう

に社会から無視されたら、きっと悲しいと思います。ですから、老人がもっと参加できるような社会を作るように若い私たちが努力するべきではないでしょうか。たとえば、中国では祝日に親と離れている子快たちはできるだけ、親の所に帰ってきて、一緒食事をするという習慣があります。こういうことが、日本でもあってもいいのではないのでしょうか。老人が活動できる場をふやしたら、うちにいる老人の話を聞いたりして、老人に関心を持ったらいいのではないのでしょうか。



「日本語が上手ですね、日本人とあまり変わらないですね。」と日本人の友人達に良く褒められます。「日本語をどうやって学習しましたか？」としばしばと聞かれますが、その時、いつもへへへと笑いながら、ごまかしていました。この度、山本先生に「ちょっと自分の日本語学習方法について、何か書いてくれませんかね。」と依頼され、今度こそ、わたしは真剣にこのことについて考え出しました。

いまだに記憶に生々しいのは、日本へ留学に行くことを決めた三ヶ月くらい前から、私は中国上海にある語学学校の夜間部で日本語を勉強し始めました。しかし、残念なことに、三ヶ月の唯一の成果は日本語のひらかなとカタカナしか覚えたことでした。それも、最初から最後まで順番で覚えまして、もし途中から一つ仮名を出すと、また、最初から数えなければならぬことになっていました。そのため、一つの単語の発音をするに

は、大変時間がかかりました。でも、その私は日本語が分からないままできっぱりと日本にきました。いま考えてみると、当時の私は大変大胆なことをしていました。

日本に着いた初日の空港で、ごく簡単な言葉「すみません」と声を掛けられた私は、それだけでも緊張して、一生懸命にその言葉の意味を考え、何か答えようと思ったのですが、結局苦笑をもらしながら、不思議そうなまなざしをあびてしまった。

このような状態が、日本に来て二ヶ月くらい続きました。

昼間、日本語学校に通い、初心者コースでは中国出身の先生であったため、授業中はすべて中国語で説明してくれました。よる、寮に戻ると、中国出身の同級生と中国語でおしゃべりにして、まるで、中国にいるのように、日本語に触れる機会がほとんどなかった。

二ヶ月がたっても、日本語の進歩がありませんでした。と、その時心配した末に、私は外国語を学ぶことはどういうことかと一から考え直しました。どこの国でもそうなのですが、人間が赤ちゃんの時から、文字を読めるわけがないですが、しかし、毎日お父さん、お母さんの言葉を聞き、二、三才から子供がしゃべれるようになる。話しが出来ても、この時の子供はまだ文字が読めないのです。これはなぜ？私はひらかな、カタカナが全部読めるけれども、日本語が話せない。これはなぜですか？大いに疑問を持ちながら、考えた結果は、言葉というものを学ぶには、赤ちゃんのように、まず外国語と考えずに、素直に耳から受入れ、そのまままねすることである。例えば、コップを見て、こいう品物は「コップ」と発音すると単純に音で覚えます。同じ品物を見る度にその音を思い出します。カラオケも同じことと思います。大半の人は楽譜から歌を覚えたのではなく、歌手の歌を何通も聴いて、耳からその歌のメロディを覚えたと思います。ということは、まず耳で日本語に慣れることである。そのため、普段大好きな音楽を一切やめにして、代わりに日本語のテープにしました。集中的に聞かなくても良いと思って、とにかく一心に日本語の環境を作ろうと

していました。でも、いまなら言えるかもしれないのですが、日本語のテープをばかり聴くと、ちょっと退屈なことでした。

そして、覚えた言葉を使わないと、忘れやすいと思って、私は積極的に日本人の友達を作ろうとしました。「旅の恥はかきすて」と古くから日本の諺があり、最初から完璧な日本語をしゃべれるわけがないと思って、自分が全て知っている単語を使いながら、手まねで日本人達とコミュニケーションをしていました。幸いに、優しい日本人ばかりに巡り合って、おまけに色々な日本語を教わりました。本当に、感謝の気持ちで一杯です。

日本語を上達するにはもう一つの手段はアルバイト先で覚えることである。私は一番最初日本でアルバイトしたのはある喫茶店でした。女の子だから、いきなりウェイトレスにされました。日本語がまったく分からない私にとって、緊張より恐怖感さえ感じました。でも、期待されている以上、頑張るしかないと思いました。最初、お客さんの注文がほとんど分からない私は、しかたなく一生懸命お客さんの発音をその場で覚え、そして、できるだけイントネーションをまねして、テープレコーダーのように、その発音をそのままに厨房の方に再生しました。初めに、厨房のスタッフ達がいつも大笑いしましたが、皆さんが私の頑張る姿を見て段々と励まししてくれました。今思い出すと、本当に恥ずかしいことをしましたね。でも、お蔭様で、このような暖かい環境の中で、私の日本語が見事に上達しました。

しかし、いくら外国語と考えずに、素直に受入れようとしてきましたが、日本語はやはり私にとって母国語ではないのです。日本語を勉強すればするほど難しいと感じます。特に、私のように、耳から日本語を覚えた人にとって、ある程度うまく話せますが、でも、もしも文書を書くとなると戸惑いを感じます。それは、私の日本語学習方法の中で一番大きな欠点である。まるで、子供のように、日常会話が話せるけれども、もっと専門的な、上手な言葉扱いがうまくできません。ある機会に、私は日本の普通中学校の国語教科書を見ました、外国人の私はこの難しさに驚きました。もっともっと日本語を勉強したい気持ちも

益々湧いてきました。これも、私は愛知大学に留学する一つ大きなきっかけでもあります。うれしいことに、大変優秀な日本語の先生と巡り合っ
て、楽しく、充実した日本語の勉強ができて、今後の学習するには大変助かりました。

以上、私の日本語の勉強方法であります。ご参考まで考えてみて下さい。

<2-3ページのクイズの解答>

1 studio apartment 2 satellite town 3 outlet
4 written test 5 stapler 6 hotel at a railway
terminal 7 gas station 8 cheating
9 automatic pencil 10 marker pen 11 after
sales service 12 pay raise 13 complaint
14 air conditioner 15 cream puff
16 rearview mirror 17 steering wheel 18 seat
for the aged 19 night game 20 jeans

<5ページのクイズの解答> (6) のマンション
(mansion) は英語起源ですが、それ以外はすべて
フランス語起源です。したがって、答えは9つ
です。なおそれぞれの原語を以下に示しておさ
ます。(1) enquête (2) vis (3) piment
(4) silhouette (5) chou à la crème (シ
ュ・ア・ラ・クレーム) (7) crayon (8)
dessin (9) terrasse (10) concours

<編集後記>

発行が遅れましたが、本年度最初の名古屋校舎『語研ニュース』をお届けします。昨年度までの『L.L.ニュース』は今年度から豊橋校舎語学教育研究室が引き継ぎ、発行を継続することになりました。名古屋語学教育研究室では新たに表紙、レイアウト等独自に考案・作成しなければならず、これに時間を要しました。しかし内容豊かな『ニュース』に仕上がったと喜んでます。投稿をいただいた先生方にお礼を申し上げます。年2回の発行を予定しています。今後とも、学生諸君の啓発のため、奮って原稿をお寄せください。

(編者一同)

'99公開講座「言語」のご案内

愛知大学言語学講話会

(前期)

愛知大学豊橋校舎研究館2階会議室
午後2時半～4時半

1999年

①4月17日(土)

「140年前のフランス・空想小説—E. アプー
の場合—」 加藤俊夫(愛知大学名誉教授)

②5月15日(土)

シンポジウム「日本とフランス—その文化受容を問直す—」
(コーディネーター) 中島昭和(中央大学名誉教授)
「鉄仮面伝説と日本の作家たち」

坪井 一(東洋大学名誉教授)
「中原中也とフランス詩」

近藤晴彦(文芸評論家)
「幕末以来の日本とフランス」

出口裕弘〔作家・フランス文学者〕

③6月5日(土)(2講義開催)

「英国中世の大いなる遺産：リンデイスファーン
写本を中心に—ラテン語本体と古英語行間注—」
田本健一(愛知大学国際コミュニケーション学部教授)
「イギリス式庭園について—思潮史と文化史の見
から—」 安藤 聡(愛知大学経営学部助教授)

④6月19日(土)

「「健康」ということばの語源を探る」
荒川清秀(愛知大学国際コミュニケーション学部教授)

⑤7月10日(土)

「言語の起源について考える—P.リーバーマンの
説をめぐって—」 伊藤忠夫(中京大学教養部教授)

(後期)

愛知大学車道校舎3号館第3会議室
午後2時半～4時半

1999年

⑥9月18日(土)

「フランス革命期に議員の意味で用いられた
《mandataire》をめぐって」
田川光照(愛知大学経営学部教授)

⑦10月16日(土)(2講義開催)

「ミハイル・バフチンとテキスト解釈」
小坂敦子(愛知大学法学部講師)
「明治時代と訳語—新しい訳語をめぐって—(5)」
知念広真(愛知大学法学部教授)

⑧11月6日(土)

「学習文法とコーパス」
塚本倫久(愛知大学国際コミュニケーション学部助教授)

⑨11月20日(土)(2講義開催)

「〔未定〕」 清水伸子(愛知大学経済学部講師)
「異文化コミュニケーションと話し方の問題
—異文化語用論の立場から—」
三川克俊(愛知大学経済学部講師)

⑩12月11日(土)

「〔未定〕」 常石希望(愛知大学法学部助教授)

2000年

⑪1月22日(土)

「朝鮮半島における文字の歴史について—漢字とハ
ングルの関係—」 陶山信男(愛知大学法学部教授)

(名古屋語学教育研究室発行)